

地球社会Ⅳ

1. テーマ

地球市民のコミュニケーション論と日本社会論

2. 授業内容

グローバル化する現代社会のなかで、主権者である市民として生きていくために、コミュニケーションとは何かについて考え、それをふまえて現在の日本社会をどうとらえたらよいかを考える。

3. 授業計画

第1部 地球市民のコミュニケーション論

- 1 コミュニケーションとは？
- 2 パーソナル・コミュニケーションとマス・コミュニケーション
- 3 マス・メディアの発達：本・雑誌・新聞・ラジオ・テレビ
- 4 コミュニケーションと社会：社会意識とは？
- 5 マス・コミュニケーションと世論：社会意識の現代化
- 6 日本のマス・メディア：本・雑誌・新聞・ラジオ・テレビ
- 7 日本のマス・コミュニケーションと世論（1）：1950年代まで
- 8 日本のマス・コミュニケーションと世論（2）：1960年代以降
- 9 マス・コミュニケーションの社会的影響とコンピュータ・ネットワークの発達
- 10 メディア・リテラシー：市民のコミュニケーション術

第2部 地球市民の日本社会論

- 1 社会をとらえるとは？
- 2 日本社会学の到達水準
- 3 人口と家族
- 4 地域社会：都市と農村
- 5 産業・労働・階級・階層
- 6 社会情報と社会意識
- 7 社会問題と社会福祉
- 8 日本社会：構造と特性
- 9 文化変容と社会運動
- 10 日本社会と地球社会

4. 授業方法

問題提起になるような講義をおこない、それについての意見を求める形で、討論する。講義と討論にかんして、次の時間までに短いレポートを出してもらう。授業の最後までに、地球市民としてのコミュニケーションのあり方、および地球市民の眼からみた日本社会について、自分なりの意見をもてるようにする。

5. 評価方法

出席と討論参加が30%、毎回の短いレポートの合計が40%、学期末のレポートが30%で評価する。

6. 教科書・参考書

参考書：『地球市民学を創る：地球社会の危機と変革のなかで』（庄司興吉編著、東信堂、ISBN978-4-88713-896-4）

参考書：『社会学の射程：ポストコロニアルな地球市民の社会学へ』（庄司興吉著、東信堂、ISBN978-4-88713-874-2）

参考書：『地球社会と市民連携』（庄司興吉著、有斐閣、ISBN4-641-07624-3）。

この講義の概要と反射光線は庄司のホームページに載せるので、必要な場合はそこからダウンロードすること。ホームページは2つあり、

一つは「地球市民学を創る <http://www2.seisen-u.ac.jp/~shoji/index.htm>」、

もう一つは「市民の社会学をめざして <http://www.toshima.ne.jp/~kokshoji/index.htm>」。
どちらでも良いが、前の場合は「清泉女子大学地球市民学科」、後の場合は「市民のための社会学」のなかから探すこと。

I コミュニケーションとは？

意思の疎通

行為の一形態

ハバマスの説

行為

表出的 expressive

道具的 instrumental

意思疎通的 communicative

戦略的 strategic

行為の一要素

マルクスは、道具的行為によって展開する世界＝経済・社会、あるいは道具的行為が戦略的行為に展開することによって拡大してきた社会＝政治経済的社会、を明らかにした。

しかし、意思疎通的あるいはコミュニケーション的行為によって展開する世界にたいしては不十分だった。

近代世界の大前提は、コミュニケーションの合理化によって、

理想的対話（状態）Diskurs が生み出される可能性に道を開いたこと。

その可能性をもっと追求すべき。

しかし、公共性の構造転換：経済や政治のシステムが大きくなり、社会や文化、さらにはその基礎にある生活世界を植民地化してきている。

コミュニケーション的行為をもっと重視し、生活世界に合うよう社会と文化を建て直し、それに経済や政治を従わせていくことが必要。

この意味で近代の理想はますます重視して実現していくべき。未完の近代。

ルーマンの説

行為そのものがコミュニケーションだとも。

合理性の自覚化が出発点であったかもしれないが、それ以後は、コミュニケーションがコミュニケーションを呼ぶ自動的展開。その加速度的。

コミュニケーションがつぎつぎに新しい社会システムを創り出してきた。

それらが今や世界社会 Weltgesellschaft を形成。

環境問題もそのなかで起こる。

中間集団の重要性もその過程で自覚されてくる。

コミュニケーションをつうじてコミュニティのシステムである社会を変えていくことが重要。

これらの理論を、権力支配のシステムやそれに対抗する市民的システムの形成の理論につなげていくことも可能。

フーコー、ドゥルーズ、ガタリの理論への接続。

フーコー：近代社会は、特有な言説によって人びとの身体を管理し、人びとを働かせ、子供を産ませ、資本主義と国民国家を築き上げてきた。

ドゥルーズとガタリ：人類の歴史は、われわれの身体を基礎としたさまざまなマシンの支配欲・征服欲で動かされてきたが、営利競争や戦争やそれらへのさまざまな反対運動などをつうじて、われわれの身体の解放の基盤をも創り上げてきた。

ネグリとハートの理論：「帝国」とマルチチュードの理論への接続も。

米ソ冷戦終結後の世界には、アメリカを中心とする世界支配の新しいシステム＝「帝国」が成立していて、それにたいして、支配されている圧倒的多数の人びとのさまざまな抵抗運動が起こっている。

最終的には、これらの人びとの理論をも乗り越える新帝国と市民化の理論への接続も可能。

そのためにも、

進化論につなげ、生態系内在性を前提とすることが必要。

行動 behavior と行為 action：行動から行為へ

媒介：媒体 medium, media

道具と記号、道具行動、記号行動、→行為、と考えるのが妥当だが、そのためにも、行動から出発。

行動＝行為の即自態、ヒトから人間への通路。

行動の要は交感。

交感が基礎となり、そこからすべてが分化した、とみるのが妥当。

生殖＝再生産の原型

交感＝感情のやりとりは非常に具体的な問題

その要が愛。男女の愛、親子の愛、きょうだい愛、友愛、博愛

やがて道具が絡んでくる。

主体化：労働、対自然、物質代謝 metabolism、使用価値の創造

労働対象、労働手段、→生産手段、文明の基礎

旧石器時代、新石器時代、青銅器時代、鉄器時代

農業、工業、→三次産業、情報産業

相互主体化

交換：財の交換、使用価値→交換価値、市場の形成

やがて、記号→言語の介入

交信（コミュニケーション）：世界の意味づけ、中間義の文化の誕生

このもとで

交感 も文化化する

言語的コミュニケーション

非言語的コミュニケーション

さまざまな芸術へ

他方では

上位主体化：人の人による支配、政治、戦争

行為の基本構造（『市民連携』p.190, 『創る』p.111）

労働

交換、交感、交信（コミュニケーション）

上位主体化：支配

II パーソナル・コミュニケーションとマス・コミュニケーション

パーソナル・コミュニケーション personal communication

口コミ

対面的関係性 face-to-face relationships

交感：すべての行動・行為のもと→コミュニケーションのもと

目は口よりもものを言う

愛に言葉は要らない

無口な親父、優しい母

阿吽の呼吸

無意識のきょうだい愛

身体的エネルギーの交換、身体連鎖としての社会、世代交代の無限連鎖

労働とコミュニケーション

呼びかけ、物まね、独り言、対話、掛け声、→民謡

集団労働が言語を生み出したという説：エンゲルス

言語はしかし単なる手段ではない→構造主義

交換とコミュニケーション

交換をつうじて言語はさらに発展する

海彦山彦伝説

取引、駆け引き、市、競り

交感の高度化とコミュニケーション

愛、ささやき、語らい、『ロミオとジュリエット』、『シラノ・ド・ベルジュラック』

躑（しつけ）、教育、夫婦げんか、きょうだい喧嘩

コミュニケーションによる社会の組織化

親族の構造（レヴィーストロース）

親族呼称、婚姻規則

一体感、アイデンティティ

言語による包摂 or 囲い込み、言語による排除

自民族中心主義 ethnocentrism、ナショナリズム nationalism

国際語 international language、地球語 global language

支配とコミュニケーション

神話

宗教

宗教と国家

神政

宗教と政治の争い+新教と旧教の争い（分派間抗争）→政教分離

パーソナル・コミュニケーションからマス・コミュニケーションへ

小さな社会（集団）で

陰口

仲間はずれ、村八分
いじめ

大きな社会へ：支配の拡大・確立

神仏・教祖・支配者などの像を建てて、排跪をつうじた忠誠を引き出す

古代エジプトの例、大仏建立と国分寺建立、八幡神社（源氏崇拝）、東照宮（徳川家崇拝）、明治天皇のご真影と行幸、20世紀社会主義諸国の個人崇拝

教社：神社、仏寺、教会、モスク、

民主主義も同様の面：クロムウェルの像、ワシントンの像、リンカンの像

大きな社会へ：民衆の反応

噂、流言蜚語

プガチョフ伝説：プガチョフの乱 1773-75、モスクワに迫る。最後は裏切りで捕らえられ、残虐な処刑。処刑されたのは別人で、生きているとの噂。『大尉の娘』

民衆の抵抗や願望の表明

日本の例：菅原道真伝説、義経伝説、西郷（隆盛）伝説

文字の普及

写経、写本の時代

テキスト（教典）が個人的に転写され、時と所を超えて普及していく。

ユダヤ教・キリスト教、仏教、儒教・道教、イスラーム

支配者はこれらの宗教を支配の手段にしようとする。

西洋の場合：カトリックと封建領主・国王、やがて絶対主義

日本の場合：朝廷は神道と仏教、武家政権は仏教の改革から儒教の諸派へ

文字を使って支配を維持していこうとする例

高札

まだ識字率が低いので、仲介者が必要

支配のために、支配を維持するために、教育が必要となる

大宝律令 701 で大学と国学、貴族の私学、空海の綜芸（しゅげい）種智院、寺社組織

足利学校、創建については諸説。永享年間 1429-41 に快元を校長として中興。近世の儒学隆盛の源流となる。

キリシタン学校、コレジヨ（学林）、セミナリオ（修行所）

藩校（藩学）、郷学、私塾、寺子屋、とくに寺子屋は町人、農民を教育。

こうした教育がやがて民衆を目覚めさせていく。

III マス・メディアの発達：本・雑誌・新聞・ラジオ・テレビ

マス・コミュニケーションとマス・メディア

パーソナル・コミュニケーションからマス・コミュニケーションへの展開にはマス・メディアの発達が不可欠。

文字、活字、活版印刷

手書き・写本（写経）の時代から木版印刷の時代を経て、活字・活版印刷の時代へ。

グーテンベルグ Gutenberg, Johannes 1397-1468

活字鑄造・活版印刷術の発明者。ドイツ，マインツの生れ。

55年に四十二行聖書とよばれる美しいラテン語聖書の機械的印刷完成。当初出版は200冊ほど。グーテンベルク聖書。

貧困と人々の忘却のなかで亡くなったが、彼の発明した技術は急速に全ヨーロッパに広まり、宗教改革や科学革命を促す。（飯田賢一『世界大百科事典』（平凡社））

本

ユネスコの1964年の基準「本及び定期刊行物統計の統一化に関する勧告」：本とは表紙を除き、少なくとも49ページの不定期刊行物で、その国で出版され一般的に入手できるもの。但し(1)主として広告の目的で刊行されるもの、(2)一時的な性格を有するもの(時刻表、電話帳など)、(3)文章記述が最重要部分を占めない楽譜、地図類などは除外。（清水英夫『世界大百科事典』（平凡社））

四つ折りの四つ折り（16ページ）を単位としてその3倍を超えるもの。

雑誌

一定の間隔をおき長期にわたって刊行を続ける出版物。新聞や印刷通信物などとあわせて定期刊行物 **periodical**，図書館では逐次刊行物とも呼ばれる。新聞などにくらべると1号ごとの内容的なまとまりが強く、発行間隔がより長いことに耐えうるような編集、印刷、造本などがなされている。継続刊行ではあっても、双書などのように当初から全容がはっきりしていてその部分をかさねてゆくのは異なり、1号ごとの刊行が主眼となり誌齢は試行の発展（または縮小）として結果する。

雑誌のかたちをした最初の定期刊行物は、ハンブルクの神学者で詩人だったヨハン・リスト Johann Rist が創刊した『エアバウリッヒェ・モーナツ・ウンターレードウンゲン Erbauliche Monats Unterredungen』(1663 - 68)。ついで、フランスの著述家ドニ・ド・サロ Denis de Sallo の『ジュルナール・デ・サバン Journal des sçavans』、イギリスのローヤル・ソサエティの『フィロソフィカル・トランザクションズ Philosophical Transactions(哲学論集)』がともに1665年に刊行。これらはいずれも、17世紀の知識人たちが学問への意欲を語り、その成果を同好の士に知らせようとしたもの。72年には知識人の「たのしみ」のための雑誌『メルキュール・ギャラン Mercure Galant』(のち1714年に『メルキュール・ド・フランス Mercure de France』と改題)が創刊。作家ジャン・ドノー・ド・ビセ Jean Donneau de Visé が法廷ニュースや小話や小詩片などを編集したもの。このあと、ドイツ、イギリスなどに同種の雑誌が続く。

マガジン **magazine**：イギリスの印刷業者エドワード・ケーヴ Edward Cave の『ジェントルマンズ・マガジン Gentleman's Magazine』(1731年)以来。

日本最初の雑誌：柳川春三(やながわしゅんさん)の『西洋雑誌』(1867(慶応3年))

(荒瀬豊『世界大百科事典』（平凡社））

新聞

広義には、多数の人々に情報、意見などを伝達するマス・コミュニケーション mass communication, プブリツィスティク Publizistik の全媒体。英語のプレスやジャーナリズム。

狭義には、多数の読者のために刊行される、時事についての報道、解説、評論を主な内容とする定期印刷物。新聞紙 newspaper。

機関紙のように不定期であったり、少数の読者を対象としたりするものもある。昭和初期までは新聞とはニュースのことであり、ニューズペーパーは新聞紙といった。

機能

報道

論評

教育

娯楽

広告

歴史

15世紀半ば、「フルークブラット Flugblatt」

ミルトン John Milton の『アレオパジティカ Areopagitica』(1644)は言論の自由を提唱した先駆的著作。ピューリタン革命の時期。

新聞の大衆化：1833年ニューヨークでデイ Benjamin Day が創刊した『サン The Sun』、『ニューヨーク・ヘラルド The New York Herald』(1835)、『ニューヨーク・トリビューン The New York Tribune』(1841)など。

「ペニー・ペーパー penny paper」：わずか1セントなので、それまで6セントもした新聞に手を出せなかった大衆を読者として開拓。

(新井直之『世界大百科事典』(平凡社))

電気技術の普及とともに新しい媒体

電信

モールス電信：1837年、S. F. B. モールスが発明。

印刷電信：1837年、C. ホイートストンらの指示電信機。

日本では、1849(嘉永2)年に佐久間象山が松代藩においてオランダの文献『理学原始第2版』(1847)をもとに指示電信機を作り、電信の実験に成功。54年(安政1)にペリーがモールス電信機を将軍に献上するより5年前。(石野福弥『世界大百科事典』(平凡社))

基本的にはパソコミ。新聞などの補助手段に。

電話

1876年、A. G. ベルによって発明。

日本で初めて電話が開通したのは1889年。逓信省が東京～熱海間で公衆用市外電話の取扱いを開始。

電話そのものはパソコミ。1:1が1:多となるところに放送が。

パーソナル・コミュニケーションからマス・コミュニケーションへ

さらには、パーソナルからコミュニアルをへてマスへ

電話→校内放送→ラジオ

影絵→映画→テレビ

ラジオ

無線による音声・音響の放送、およびその受信機。

1922 年 8 月、逓信省通信局が「放送用私設無線電話」と呼ぶ。現行電波法(1950 制定)でもラジオは「無線電話」。「電波を利用して、音声その他の音響を送り、又は受けるための通信設備」。街頭や学校、職場、店舗などの有線ラジオ放送は含まれない。送信するのは放送局、受信するのは公衆。点から点へのポケット・ベル、タクシー無線などは含まれない。ミニ FM 放送などが境界線上。

短波放送、

中波放送、AM: Amplitude Modulation 振幅変調

超短波放送、FM: Frequency Modulation 周波(数)変調

世界最初の正式放送は 1920 年 11 月 2 日、アメリカ、ペンシルベニア州ピッツバーグの KDKA 局が行ったハーディング大統領の選挙報告。

日本：1925 年 3 月 22 日(放送記念日)

(後藤和彦+稲葉三千雄『世界大百科事典』(平凡社))

音声から画像・映像へ

テレビ

日本：1927 年、高柳健次郎、走査線 40 本、1 秒間当りのコマ数 14 のテレビ。当時としては世界でもっとも高い水準。

1933 年：アメリカの V. K. ツウォリキン、アイコノスコープ管（最初の実用的な撮像管＝真空管）の開発。日本でも 35 年に高柳らによってアイコノスコープ管の開発に成功

1937 年：イギリス、テレビ放送の標準方式を走査線 405 本と決定

1941 年：アメリカが、日本の現在の標準テレビ方式にもつながる走査線 525 本方式(NTSC 方式)を決定。

1945 年：アメリカのローズ A. Rose らが、アイコノスコープ管よりはるかに感度が高く、鮮明なテレビ画像が得られるイメージオルシコン管を開発、本格的なテレビ放送時代への道を開く。

1953 年：日本テレビ放送開始。

(和久井孝太郎『世界大百科事典』(平凡社))

撮像管の発達により、カラーテレビも可能になる。

撮像管はそこご撮像版（トランジスタ transistor←transfer of a signal through a varistor, transit resistor）に。

IV コミュニケーションと社会：社会意識とは？

1 コミュニケーションと意識

意識とは？

自己意識→個人意識

個人意識なんてある？

言語はもともとたくさんの人に共有されている。そうでなければ言語でない。二人だけの秘密のコトバもないことはないが、それも大勢の人に共有されている言語があつてのこと。

共有されている意識→共同意識、集合意識、社会意識

2 社会意識とは？

社会生活と社会意識

意識の流れ *stream of consciousness*、横の広がりと縦の流れ

それを支えているもの：身体、世代更新の無限連鎖、生物進化、宇宙進化

だから正確には、社会存在と社会意識

意識が存在を規定するのではなくて、存在が意識を規定する（マルクス）

人間が言語を使って世界を整理し、秩序づける（カント、デュルケム、レヴィーストローズ）

でもそれはやはり、言説の展開として、社会過程の蓄積すなわち歴史をとおして行われるので、存在は長い目で見れば意識を規定していく（フーコー）

いや、存在と意識とは、そのようなものとしてけっきょく一体なのだ（ハイデッガー、デリダ）

3 汎神論の意味

スピノザの再評価（ドゥルーズ＋ガタリ、→ネグリ）

神をこの世に取り戻し、内在させる。

デカルトは、この世界を起動させるために神を必要としたが、動き出して以後の世界については、神は要らない、という風潮に道を拓いた。

近代思想の問題性

しかし、そうではなく、この世界の動き、この世界のあり方そのものが神なのだ。

だから、すべては善くも悪くもない、ということも言える。

しかし、にもかかわらず善悪を論じてきたのが人間だ。

だから、けっきょくすべてが人間の責任なので、いかなることも人間を超えるもの＝超越者のせいにはできない。

するとけっきょく、人間と社会のあり方・行き方を決めていくのは大勢の人びと *Multitude* の意志なのか？

マルチチュードの歴史的形態としての労働者の運動

それとも市民の動き？

4 個人意識と社会

このような視点から個人意識に戻る。

意識はほんらい社会的なものだが、そのなかで、また確かに、個人意識は存在するから。

精神分析（フロイト）

自分の思うままにならないことで苦しむ人たち。
 とくに性的不能（インポテンツ）
 人間の意識の深さと広がり
 それが気づかれない。
 夢、し損ない、隠された欲望や願望
 意識、下意識、無意識
 自我(Ich or ego)、イド(Es or id)、超自我(Ueberich or superego)

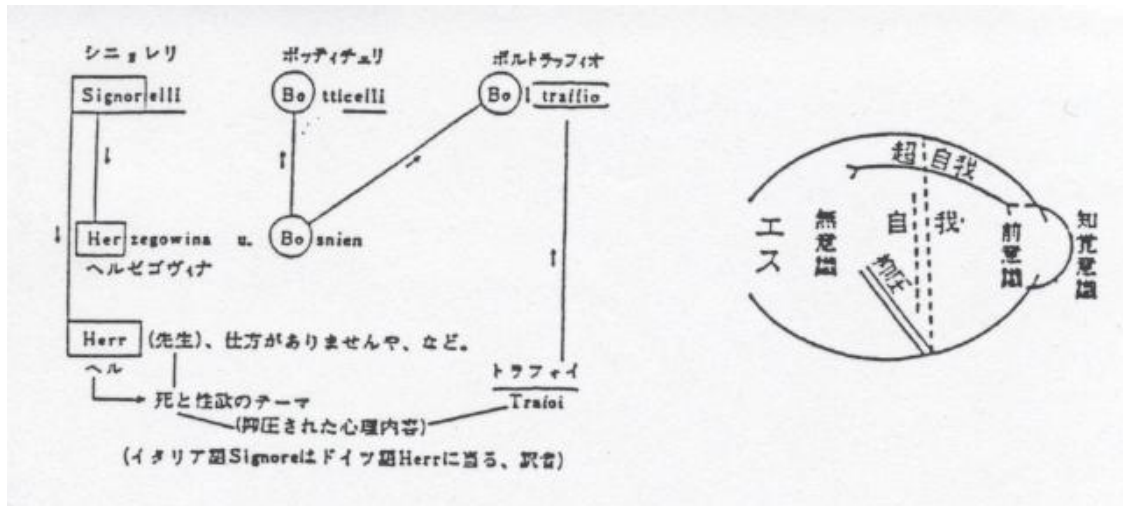


図1 言い違いの例

図2 個人精神の構造

5 個人意識と社会意識

無意識のとてつもない広がり（ユング, Carl Gustav JUNG, 1875-1961）
 普遍的無意識（集合的無意識）
 原型 Archetypus→神話、宗教

社会心理

群集心理（ル・ボン、タルド）
 大衆の意識（オルテガ、マンハイム）
 半思想（サルトル）

6 意識としての社会

社会はけっきょく社会意識なのかもしれない。
 いや、社会と社会意識とは一体にして不可分なのだ。
 だから、社会を支える私たちの行為は、つねにコミュニケーションの要素を含む。
 というより、コミュニケーションそのものなのだ。（ルーマン）
 だからこそ、現代社会を考えるうえで、マスコミはとても重要なのだ。

V マス・コミュニケーションと世論：社会意識の現代化

1 社会意識の前近代的形態

パーソナル・コミュニケーションからマス・コミュニケーションへ

パーソナル・メディアからマス・メディアへ

文字→手紙→（写本、写経）→（活版印刷革命）本、雑誌、新聞

→（電子革命）電子媒体、インターネット
ビラ、チラシ

音声→メガホン→拡声器

→（電気革命）電話→（校内放送、地域（有線）放送）→ラジオ

絵→絵巻物、紙芝居→影絵、幻灯

→（電気革命）映画→（映写会、映画館）→テレビ

→（電子革命）マルチメディア化、地上デジタル放送

社会意識の前近代的形態

流言蜚語：世論の前身

平家物語、琵琶法師。義経記、義経伝説。太平記、楠木正成伝説。

語り部の来訪。能、歌舞伎などの上演。

巡回芝居（小屋）などの重要性。

都市での発展

浮世絵、瓦版、歌舞伎などの重要性。四十七士伝説。

「都市世論」の形成。

前近代から近代へ：都市、群集、群集心理

ル・ボン

タルド：発明と模倣、→ファッション

2 社会意識の近代化

世論 Public Opinion：公衆の意見

公衆←市民←市民社会

ブルジュワ bourgeois とシトワイヤン citoyen

世論と輿論

ジャーナリズムと世論

図書・雑誌と世論

コーヒーハウス

戦後日本の民主主義と喫茶店：警職法闘争 1958 から安保闘争 1960 へ

3 社会意識の現代化

マス・コミュニケーションと世論

新聞の大衆化

公衆から大衆へ

大衆社会

新聞と世論

Lippmann, W., 1922, *Public Opinion*, 4th printing, 1954, Macmillan. （掛川トミ子訳, 1987, 『世論』岩波文庫）

コピーの世界：疑似環境

4 世論調査

ギャロプ Gallup, George H.

1936 年、サンプリング法（サンプル数 2000、割り当て法 quota method）でルーズヴェルトの当選を予想。

1948 年には同じ割り当て法でデューイの当選を予想して失敗。結果的に、ランダム・サンプリング法 random sampling の正しさを証明。現在では多くの場合ランダム・サンプリング。

目的によっては、層化無作為抽出法 stratified simple random sampling も。

5 ラジオからテレビの時代へ

新聞からテレビへの間をつないだ映画

大衆社会と大衆国家→全体主義の時代、ファシズム、とくにナチズム

大衆集会、映画

共産主義と個人崇拜

帝政の名残、指導者の像、新聞、大衆集会、映画、ラジオ

大衆社会の日常化

大統領や総理が直接国民に語りかける。

ポピュリズム：アメリカの大統領と日本の首相。とくに小泉首相の場合。

そのよい面と悪い面。

6 コンピュータの普及

タイプライター→ワープロ。とくに日本語や中国語など文字の多い言語の場合。英語帝国主義を忘れてはならないが。

パソコン・ネットワークの広がり

インターネット

文字：メール

音声：チャット

映像：静止画→動画

総合情報：ホームページ

無数のホームページ→無限大の情報世界

全体像、総体像を得ることの困難。

ヴァーチャルな世界

新しいビジネスの叢生

NGO や NPO の役割

新しい政治の世界は開かれるか？

VI 日本のマス・メディア：書籍・新聞・ラジオ・テレビ

1 日本におけるマス・コミュニケーションの発達

パーソナル・コミュニケーションの時代

神話→風土記、古事記、日本書紀

→語り、伝承、記録、統制、統一国家成立との関係

漢字から漢字＋仮名へ

写経、写本、歌、物語文化、語り部、芝居小屋

噂、流言蜚語、落書

南蛮人、紅毛人の時代、活版印刷の導入、伊曾保物語（キリシタン版）→鎖国で中断

その後は版本本、瓦版

2 活版印刷の再興と普及

明治以後、活版印刷へ

本

福沢『西洋事情』、中村正直『西国立志伝』、など

雑誌

『明六雑誌』1874：森有礼や福沢諭吉。

『花月新誌』1877：成島柳北

明治 0-10 年代，自由民権の主張をかかげる雑誌，政府の言論弾圧によって短命。

『国民の友』1987：徳富蘇峰の主宰した民友社、平民主義。

『日本人』1988：志賀重昂，三宅雪嶺らの政教社、本格的な評論雑誌の時代。

『太陽』『文芸倶楽部』1895：博文館。明治後期を代表する雑誌。

『中央公論』：大正時代、編集長滝田樗陰のもとでデモクラシー(民本主義)を唱える。

『改造』1919：海外の新思想の紹介、知識人読者層の拡大。

芸術や科学の諸領域の雑誌も，第1次世界大戦以後盛んとなる。

しかし，日華事変から第2次世界大戦にかけて内容や資材についての統制が強化。

時局を論ずることを主とする雑誌には〈総合雑誌〉という日本独特の官製呼称。

3 新聞の発達と普及

全国紙

三大紙：

朝日：1879 大阪で創刊。現在、朝刊で 805 万部（日本 ABC 教会調査）。

毎日：1872 年東京で『東京日日新聞』として創刊。現在、393 万部（公称）。

読売：1874 年東京で創刊。発行部数 1000 万部以上、世界最大。

これについて、産経、日経、東京？

地方紙：一県一紙が大勢。沖縄のような例外も：琉球新報、沖縄タイムス

各戸配達制

戦争中の新聞の役割

国際比較

4 ラジオの発達と普及

NHK

社団法人東京放送局 JOAK、1925. 3. 22 放送開始。

1926 東京、大阪、名古屋の放送局が社団法人日本放送協会として統一。政府機関的な性格。戦争中の役割。 1945.8.15 玉音放送。1950 特殊法人日本放送協会に改組。

民間放送：1951. 9. 1 中部日本放送、毎日放送、放送開始。その他の民間放送続く。

5 テレビの発達と普及

NHK：1953.2.1 テレビ放送開始。1956.12 カラーテレビ実験放送開始。1957.12.28 カラー試験放送開始。

民間放送：1953.8.28NTV（日本テレビ放送網）放送開始。1955.4.1 ラジオ東京（現 TBS）放送開始。1957.11.1 日本教育テレビ（現テレビ朝日）設立（1959.21.放送開始）。1957.11.18 富士テレビジョン設立（1958.12 富士テレビジョンに改称、1959.3.1 放送開始）。4 大ネットワーク NNN, JNN, FNN, ANN 成立。1957.12.28 日本テレビ、カラー放送開始。

1958.12.23 東京タワーから放送開始。

1960.9.10 カラー本放送開始。NHK 東京、大阪の総合、教育。日本テレビ、TBS、読売テレビ、朝日放送。

1964.4.12 東京 12 チャンネル（現テレビ東京）開局。

1968.5.5 琉球放送、沖縄テレビ放送、カラー放送開始。

ケーブルテレビ

もともとは難視聴対策

衛星放送の普及と併行して多チャンネル化に貢献

衛星放送

BS: 1984.5.12NHK 試験放送開始。1989.6.1 本放送開始。

1990.11.30 日本衛星放送 JSB, WOWOW 試験放送開始。91.4.1 本放送開始。

CS: 1992 スカイポート TV および CS バーンによる放送開始。

有料放送の普及

デジタル化

衛星放送から

地上放送も、地デジ

6 日本の情報社会化

情報化とは？

情報、知識、理論

ネットワーク

コンピュータの発達過程

大型と端末

パソコンの普及とパソコン通信

インターネット

アメリカが軍事目的で開発

商業化

ネティズン論

デジタルデバイドの問題

携帯

携帯電話

ネットワーク化

ワンセグ：マルチメディア化

デジタルプアの問題

活字文化の危機

VII 日本のマス・コミュニケーションと世論（1）

1 支配意識と対抗意識

意識の明確化されたものが思想：イデオロギーとユートピア←マンハイム

民衆心理、民衆意識：半思想（サルトル）、集合意識（デュルケム）、集合的無意識（フロイト、ユング）、←戦後日本の社会心理学

両者のあいだに入り媒介する知識人／マス・メディア

2 江戸時代の支配意識と対抗意識

支配意識（イデオロギー）：封建制、身分制（士農工商）、「民は、寄らしむべし、知らしむべからず」←→「見ざる、聞かざる、言わざる」

民衆心理、民衆意識：不当感、不満感、飢餓感 → 百姓一揆

対抗意識（ユートピア）：安藤昌益?-1762、大塩平八郎 1793-1837、吉田松陰 1830-59、など

幕末の民衆心理・民衆意識：「世変わり」を感得し、期待感。「ええじゃないか」など。

活版印刷が消滅した後、木版、瓦版、などがメディアとなる。不完全なマスコミ。著書は依然として筆写、写本。

3 近代日本（明治から昭和戦前期まで）の支配意識と対抗意識

明治の支配意識（イデオロギー）：大政奉還、王政復古、明治維新——天皇を呼び起こして、国民形成と近代化を図る。

明治の対抗意識（ユートピア）：自由民権運動——不平士族が、民衆の期待感を背景に、西欧近代の解放思想を主張。スペンサー（松島剛訳）、1881、『社会平権論』、ルソー（中江兆民訳）、1882、『民約訳解』、など。

支配意識の一応の完成としての明治憲法：自由民権運動などを押さえて、天皇主権の「立憲君主制」←→イギリスの立憲君主制。

対抗意識のさらなる展開

明治の社会主義：大逆事件 1910 で「冬の時代」へ。

大正モダニズム：哲学、社会科学、文学などから、モボ・モガ、まで。

大正デモクラシー：吉野作造「民本主義」、ロシア革命の影響で社会主義も広がる。

労働運動・農民運動の展開。

この過程で、本、雑誌、新聞、が大きな役割を果たす。

反動として、右翼・軍部が、農村・農民の窮状を背景に、対外侵出を強行。

右側からの対抗意識が支配意識となる：ウルトラ・ナショナリズム、天皇制ファシズム。

1 5 年戦争：満州事変 1931, 2・26 事件 1936, 太平洋戦争 1941, 敗戦 1945.

この段階になると、ラジオが大きな役割。終戦まで、支配意識の宣伝と扇動。

底流にあった民衆意識：集合意識・無意識

百姓：農民の生活と意識・無意識

柳田国男, 1910, 『遠野物語』

都市に働きに出る農民：「第二のムラ」（擬制村）

町人から都市民へ

対抗意識の一定の成果：大正デモクラシー、普選運動→普通選挙法 1925, しかし治安維持法と抱き合わせ

ここから、対抗意識と支配意識の微妙な争いをへて、日本型ファシズム（天皇制ファシズム）へ。軍部の独走にすべての責任があるのか？ 軍部を独走させたのは何なのか？

4 戦後日本の支配意識と対抗意識

戦後民主化

日本国憲法（1946.11.3 公布、1947.5.3 施行）

財閥解体、農地改革、労働組合と労働基準法、教育基本法と六三制教育、など

逆コース：サンフランシスコ講和条約と日米安全保障条約 1951

支配意識（イデオロギー）：

日米安保を柱としてアメリカの陣営に入り、ソ連、中国などの社会主義陣営と対立。

解釈改憲の方向。

民衆心理・民衆意識としては、草の根保守、ナショナリズム、被害者意識、経済成長願望がこれを支える。

対抗意識：

新憲法を柱として平和と民主主義。一部は非武装中立。

民衆心理・民衆意識としては、被害者意識、生活向上欲求、労働者意識、市民意識。さらに広島・長崎での被害者意識。→原水禁運動。

社会主義への期待。加害者性が反省されるようになるのは、沖縄、韓国、中国などとの関係をつうじて。

戦後革新の意義と限界：労働運動、革新政党、原水禁運動、などの。

5 戦後日本のメディアと民衆意識

戦後民主化の過程では新聞、雑誌、本に加えて、ラジオが大きな役割。

尋ね人の時間。ラジオドラマ（「君の名は」）。ラジオ討論→組織的動員が盛んになり、廃止へ。

民間放送が加わって多様化。

テレビ放送開始とともにいっそう多様化。娯楽化。それをつうじてかえって画一化。

しかし、言論の自由、新聞、ラジオ、テレビの発達で、世論調査も行われるようになり、ようやく世論が顕在化。

民衆意識：集合的意識・無意識

上からの民主化、上から言われたから民主主義

生活難：都市（都市民）と農村（農民）との対立

自然発生的な権利意識→欲望自然主義へ

戦後意識：平和と民主主義の心理的基盤

しかし、農村はずっと保守の基盤

6 戦後日本の意味

憲法

象徴天皇制

非武装中立

人権保障。自由権、参政権から生存権、社会権へ。

5 5 年体制：自由民主党と日本社会党の 1 と 1/2 政党制？

欲望自然主義と理想・利害：Idee und Interesse

「人はパンのみに生きるにあらず」を全身で理解できた時代？ 現実派はそうではなかった。現実主義の意味をめぐる論争。ヘーゲル哲学の解釈。マルクスとウェーバー。

知識人と民衆。あいだにいた学生・青年。自分の行動で社会を変えられるかもしれないと思えた時代。実存主義の影響。

1960 年安保闘争の意味。

VIII 日本のマス・コミュニケーションと世論（2）

1 安保闘争から住民運動へ

1960年安保闘争：戦後保守と戦後革新の激突

議会の内と外：間接民主主義と直接民主主義

1960. 6. 15：直接民主主義の行き過ぎ

浅沼稻次郎刺殺事件、嶋中（深沢七郎：風流夢譚）事件：右翼の報復

東京オリンピック、日韓基本条約をへて、政治の季節から経済の季節へ。

1970年大阪万博。

住民運動の時代（高度成長後半期）：1960年代から70年代へ

高度経済成長の結果、生活は向上したが、いろいろな意味で環境が悪化し、それに対する抗議の運動として、住民運動が広がった。

コミュニティづくり

土地の商品化に反対する運動

生態系の一部であることを確認する運動

結果として多党化

自民党、社会党にたいして、公明党、共産党などが伸びる。

革新自治体の増加、政権交代への期待

2 高度成長後半期のメディアと社会意識

1964年、東京オリンピックでカラーテレビが普及。

1969年、アポロ計画。月面着陸。

カラーテレビが普及し、世論形成の場としてもますます重要になる。

イデオロギー

高度成長路線から日本列島改造計画へ

日本資本主義と日本的産業主義

田中角栄の役割

社会意識

経済成長に駆り立てられる。

企業意識、会社主義、モウレツ社員：企業共同体意識

主婦の自立化、全日市民→住民運動：都市地域共同体の再生の萌芽

出稼ぎ：次三男女子、長男、世帯主→三ちゃん農業：農村共同体の崩壊

対抗思想

共産党の現実主義化、柔軟路線化→定着

社会党のヨーロッパ型社民化（江田路線）、「左翼バネ」のため成功せず

どちらもヨーロッパ型社民化までいかず

3 石油危機と産業構造の転換：1970年代から80年代へ

1973年、←第四次中東戦争

1979年、←イラン革命

鉄と石油に依存する重化学工業の時代から、知識集約型機械工業の時代へ

鉄と石炭：鉄道

鉄と石油、しかし素材型重化学工業

鉄と石油と技術：自動車

他方ではコンピュータの発展、情報化、知識生産の時代へ

日本経済は回復し、世界第二の力を誇るようになる。

4 経済大国時代のメディアと社会意識

カラーテレビからケーブルテレビへ

衛星放送へ→多チャンネル化

コンピュータの普及：大型・端末型

イデオロギー

経済大国から政治大国へ：新国家主義、ネオ・ナショナリズム

中曽根康弘内閣の時代が中心。アジアの近隣諸国、アメリカの少数民族などに差別発言。

社会意識

自信の回復、日本人論、日本文化論

日本人とユダヤ人、間人主義、文明としてのイエ社会

中流意識、「中」意識、先進国意識、大国意識

対抗意識

フェミニズム、環境運動、NGO などが盛んになり、新しい意識が芽生えるが、それらを包括する思想がなかなか形成されず。

5 バブル経済と「失われた10年」のメディアと社会意識

バブル経済（プラザ合意 1985、この段階では日本、アメリカ、ドイツ、フランス、イギリスの G5、円高、金余り、世界的土地投機）からその終焉へ

米ソ冷戦の終結：アメリカの大国主義、そのもとの「国際貢献」、そのための改革

55年体制の終焉

自民党中心の時代が終わったようにみえたが、数年してまた元へ。

社会党は社会民主党となり、少数党化。民主党が右寄りのまま野党の中心に。

小泉改革の時期、そのあとは？

パソコンの普及。小型コンピュータの普及とネットワーク化。インターネット時代へ

テレビのデジタル化、マルチメディア化

イデオロギー

混迷から新自由主義の徹底へ

社会意識

事態を理解できず迷子に。民営化から規制緩和へ。戦後革新の基盤の掘り崩し始まる。労働者・生活者としての既得権の剥奪。高齢者から子供にも

対抗思想

政党再編：混迷から停滞へ。雇用機会均等法も規制緩和の波にのまれる。

時代の構造を明らかにする有力思想、見いだされず

6 21世紀以降の社会意識

小泉新自由主義派、アメリカの意向を汲み、日本の社会システムを合理化しようとして、アジア近隣諸国との関係を悪化させたばかりでなく、国内の地域的階層的な格差を拡大した。

安倍内閣は、それに乗って憲法を改正しようとしたが、世論の反発にあって敗退した。

しかし、それにたいして、対抗意識、対抗思想が明確に形成されてきているわけではない。

デジタル・テレビとインターネット時代の新しい市民の動きが鍵。

地球市民が、マス＋パーソナル・コミュニケーションを生かして、どこまで社会の主人公＝主権者となれるか？

IX マスコミの社会的影響とコミュニケーション・ネットワークの発達

1 強力効果説から読み手説へ

マスコミはけっきょくどれだけの影響力を持っているのか？

強力効果説

圧倒的に強い影響。

どんな効果でも引き起こすことができる。

多くは支配思想の影響のもとに。

二段の流れ説

中間にオピニオン・リーダーがいる。

家族、職場仲間、組合仲間、勉強仲間、遊び仲間、など。

オピニオン・リーダーによっては、対抗思想の方向に解釈され、現体制への批判が強まることもある。

読み手説

マスコミが当たり前のものになるにつれ、読者、視聴者の眼も向上してきている。

マスコミの報道を必ずしもそのままには受け取らない。

自分で発信もする。投書、抗議、その他の批判。

受け手 audience から読み手 interpreters へ。

2 議題設定説と沈黙の螺旋説

議題設定 agenda setting 説

それでもマスコミは、何が重要であり、何を議題 agenda とすべきかを決めている。「中立」と言いながらも。

沈黙の螺旋説

マスコミがある意見を報道すると、それが多数意見のようにみられ、それと異なる意見が沈黙させられていく。

マスコミで報道される意見には、おおっぴらな反対意見が出しにくい。

意図するかどうかではなく、構造が大切。主意主義から構造主義へ。

3 コンピュータからパソコンへ

コンピュータの原理

二進法、電子技術、計算、言語、コマンド、プログラム

大型化から小型化へ

大型：「センター-端末」構造。センターが故障したらすべて駄目。

小型：最初は機能が限られていたが、IC(integrated circuit)の開発とともに急速に容量拡大。

マイコン micro-computer からパソコン personal computer へ。

パソコンの普及、ネットワーク化へ。

コンピュータ・ネットワークの発達：マスコミのなかにパソコミが復活？

4 インターネットの普及

最初は軍事的目的。どこが壊されても可能なルートで到達。

中心なし。→どこも中心。はじめ大学・研究機関などに限られていたが、米ソ冷戦の終結で民間に開放。

PC からケータイへ

パソコンのモバイル化。電話との結合。

新聞やテレビも見ることができる。マスコミとパソコミとの結合？
究極の情報処理？

ヴァーチャル・リアリティ

リアリティとヴァーチャル・リアリティとからなる世界。その多様化。

ドン・キホーテにならないか？ オタク。オタクと犯罪

公共圏は成立するのか？

5 コミュニケーション・ネットワークとメゾコミの重要性

マスコミ・パソコミ・メゾコミ

『生協の白石さん』の例

「一言カード」

学生がウェブへ

本の出版→ベストセラー化

「一言カード」

匿名性をはらんだパソコミ

パソコミとマスコミとのあいだ：メゾコミ

さまざまなメゾコミ

入会勧誘

総代会、理事会、その他

これこそが甲羅←→「甲羅のない蟹」

中間集団→中間ネットワーク。ラン Local Area Network、イントラネット Intranet、
など。

6 ハイアラーキーからネットワークへ

コミュニケーションをつうじて財、サービス、情報の交換

それらをつうじて身体、身体連鎖、共有情報、知識などがつくられていく。

生活、学習、教育、研究。

これこそがネットワークの意味。社会の意味。

行為の構造。

ネットワークはピラミッド＝ハイアラーキーとは違う。

どこからでも始めることができる。

創意さえあれば。

社会のあり方の違い。垂直型から水平型へ。

帝国から市民社会へ。

ミクロ、メゾ、マクロ。

ネットワークはパソコミからメゾコミを介してマスコミにまでつながり、社会を変える可能性もある。

古いコミュニケーション手段を軽視しないこと。

一言カード、意見箱、など。

チラシ、掲示、立て看、など。

X メディア・リテラシー：市民のコミュニケーション術

1 メディア・リテラシーmedia literacy とは？

情報メディアを批判的に読み解いて、必要な情報を引き出し、その真偽を見抜き、活用する能力。

処理能力、発信能力、まですを含む。

メディア（・リテラシー）教育：1980年代後半からカナダ、イギリス、オーストラリア、アメリカなど普及し始める。しだいに全世界へ。

2 メディアの反省

原初メディア：身体、言語

健康、清潔、服装、化粧、持ち物、毎日が演技？

言葉をうまく使えているか？ 内容、ホントとウソ、言い方、相手や場面への配慮、

→普遍的語用論 universal pragmatics

パソメディア

日常会話、手紙、電話、パソコン、メール、ケータイ、

自己表現：絵、音楽、踊り、詩、小説→マスメディアに乗れば！？

メゾメディア

家庭、友達つきあい、学校、授業、職場、組合、生協、教会

学生要覧、シラバス、配付資料、パワポ、校内放送、文書、社内放送、ビラ、チラシ、タテカン、会報、一言カード、説教、法話

マスメディア

ビラ、チラシ、カンバン←高札、落書、

本、雑誌、新聞←写本、写経、瓦版

ラジオ←語り部、琵琶法師、電話

映画←絵巻物、紙芝居、影絵、幻灯、

テレビ←映画の小型化、携帯化

インターネット→パソコミ、メゾコミとの結合

3 肝心なのは市民としての自覚

自らの生きる社会のあり方、行き方を自分で決めているか？

そういう観点から、メディアを積極的に利用しているか？

4 メディア利用の反省

原初メディアの反省

身体：

修行の意味、禅、動禅

自然のなかでリラックスしてくる。健康を維持する。病を得た場合は？ 闘う？ 共生する？

言語

自分は普段何を言っているのか？ 一貫性があるか？ 自分を生かし、人を生かしているか？

パソメディアの使い方

手紙はほとんど書かなくなった。←→大事なときは書く。

電話もほとんどかけない。←→やはり電話で声を聞かないと不安だ。

ほとんどがケータイ。←→ケータイは緊急連絡用。受けが多い。

それもメールが多い。やりとりはほとんどメール。
仕事はほとんどパソコンで。

メゾメディア

授業を大事にしているか？ コミュニケーションになっているか？
学生とのその他のコミュニケーションは？
同僚とのコミュニケーションは？ みんな忙しくて時間が取れない！

——
仕事上身近な人びととのコミュニケーションは十分か？
集会をコミュニケーションとしてうまく使っているか？

——
小集団の重要性

中間集団の重要性

マスコミ接触態度の反省

新聞：もっと見たいが費用と時間がない
ラジオ：お風呂にはいるときと車を運転するときくらい。
テレビ：食事やお茶の時に見ている。重要な番組はけっこう見ている。
映画：見に行きたいが映画館まで行くゆとりがない。ビデオも見る時間が取れない。

い。

マルチメディア利用態度の反省

パソコンの利用態度はどうか？
インターネット：まだまだほんのちょっとならしか利用していないと思うが、、、
ケータイ：諸機能のうちごく一部しか使っていない。

5 どんな枠組を持っているかが問題

基本価値の確認

共存 Coexistence←消極自由 Liberty
共有 Sharing←平等 Equality
共生 Symbiosis←調和 Harmony
共感 Sympathy←友愛 Fraternity
共働 Cooperation←積極自由 Freedom

現状をどうとらえるか？

北朝鮮問題・中東・イスラーム問題など、との関わり
背後にある貧困の問題、先進国でも格差の拡大
地球環境問題と生活様式の問題
雇用の問題、年金・介護の問題、少子化・教育の問題、多文化共生の問題
運動形態と政党の問題

6 どう発信するか？

基本は投票。ただ、選挙の時の投票だけが投票ではない。

どんな情報をもとに、どんな商品はサービスを利用して生活し、どんなライフスタイルをつくりだしていくかこそ、もっとも基本的な投票。そのうえで、
いかに仕事をするか？ 組合にいかに関わるか？ 主婦は主婦でいかに主婦するか？
自治組織やサークルにいかに関わるか？
NGOやNPOにいかに関わるか？
新たに生成してきた地球的規模のネットワークをいかに利用できるか？
要するに、ネティズン＝ネットワーク市民になれるか？